

日本社会心理学会会報

226 号



発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 広報委員会(担当常任理事:藤島喜嗣)

2021年3月25日

黒田起吏氏が「第11回日本学術振興会育志賞」を受賞

本学会会員である黒田起吏氏が、第11回日本学術振興会育志賞を受賞されました。心よりお祝い申し上げます。第9回の河村悠太氏以来、本学会推薦による2人目の受賞となりました。受賞された黒田起吏氏より受賞コメントをいただきました。掲載いたします。

受賞報告:第11回日本学術振興会育志賞

黒田起吏

日本社会心理学会の推薦を頂き、2021年1月28日に第11回日本学術振興会育志賞を受賞いたしました。広報委員会の藤島喜嗣先生より執筆の機会を頂きましたので、受賞報告を致します。

育志賞とは

育志賞は、上皇陛下の天皇御即位20年にあたって創設されました。賞の趣旨は「我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士課程学生を顕彰することで、その勉学及び研究意欲を高め、若手研究者の養成を図る」というものです。人文学・社会科学・自然科学にわたる全分野の博士課程学生が対象で、今回は18名が受賞しました。受賞者には、賞状・賞牌と学業奨励金110万円が贈られます。また、所定の手続きを経ると、受賞者は日本学術振興会特別研究員として採用され、研究奨励金等が支払われます。詳しくは、育志賞のウェブサイト(<https://www.jsps.go.jp/j-ikushi-prize/>)をご覧ください。

選考プロセス

育志賞の選考には、

1. 学会もしくは大学から推薦を獲得(枠は1名)
2. 日本学術振興会での書類選考(例年、全分野から170名程度が応募)
3. 日本学術振興会での面接選考(最終的に16名程度を選出)

という3つの段階があります。

まず、黒田は日本社会心理学会から推薦されました。しかし、そもそも推薦を頂けるとは思ってもいませんでした。今年度(令和2年度)の推薦については、学会のメールニュース2468号(https://iap-jp.org/jssp/mailmagazine/mail_show/mail_show.php?mail_id=2468)をご覧ください。なお、来年度は推薦規定が変わるそうです(いつかの『社会心理学研究』に書いてあったと記憶しています)。^{【補註1】}

次は、日本学術振興会での書類選考です。書類選考では、あらゆる分野の研究が審査対象になります。自分なりに工夫して書類を作りましたが、全国レベルの書類選考も突破できると思ってもいませんでした。最後の面接選考(今年はオンライン)では、事前に7分間のスライドを作ることが求められました。スライドの準備期間は2週間でした。

昨年、オンライン学会で数百件の発表を見て勉強する中で、自分の発表資料には改善の余地しかないと感じていました。そこで、この面接選考を機に、自分なりにではありますが、スライドの作り方を見つめ直すことにしました。様々な分野の選考委員に向けてメッセージを練るのは大変でした。しかし、貴重な経験になったと思います。

面接選考は、学会大会での質疑応答と似たような雰囲気が進みました。生存バイアスにすぎないかもしれませんが、選考委員の質問に対して過不足なく答えられたと思います。面接選考を乗り越えられたのは、学会大会でみなさまからご指導いただいたおかげと存じます。

みなさまへのお礼

受賞対象となった研究テーマは「Speed-accuracy tradeoff状況における社会情報の認知処理過程」です。この研究は、文字通り「Speed-accuracy tradeoff状況で、人々がどのように社会情報(他人の意思決定情報)を使うか」をアイトラッキングと認知モデルで調べたものです。博士課程1年のときに研究の着想を得て、これまで実験を続けてきました。今回このような賞を頂き、まことに光栄に存じます。

研究を進めるにあたり、東京大学社会心理学研究室のみなさまには様々な形でサポートしていただきました。また、学会大会などを通じて多くの方々にご指導いただきました。とくに、推薦書を作成してくださった亀田達也先生・大槻久先生には大変お世話になりました。面接選考の準備では、河村悠太先生・松井大先生から貴重なアドバイスを頂きました。日本社会心理学会会長の唐沢かおり先生、学会活動委員会の金政祐司先

生には、各種手続きにおいてご尽力いただきました。関係者のみなさまに改めて御礼申し上げます。

そして何よりも、家族と友人に感謝いたします。彼らの助けがなければ、ここまで研究を続けることはできませんでした。家族と友人への感謝をもって、この受賞報告の結びと致します。

(くろだ きり・東京大学 日本学術振興会特別研究員)

編注1 社会心理学研究 36 巻 2 号会務報告内の 2020 年度第 1 回常任理事会議事録「審議事項 5. 学会活動担当 5-1. 育志賞の取り扱いについて」において、「学会が推薦する育志賞候補者について社会心理学会での活動実績がすぐれ、かつ賞の趣旨に合致する会員の推薦が求められている点ことが、唐沢会長から述べられた。審議の結果、来年度以降は、指導教員など、候補者の実績と人柄を熟知する会員からの推薦に基づき、本学会において顕著な活動実績が認められる候補者を学会からの推薦対象とすることで合意した。」とあります。黒田氏のご発言はこの議事録に言及されたものです。募集告知の際に詳細をご確認ください。

第 22 回(2020 年度)日本社会心理学会賞受賞コメント

会報 225 号で既報の通り、第 22 回にあたる 2020 年度日本社会心理学会賞が選考され、第 61 回大会総会にて発表、総会後に授賞式が行われました。前号に掲載できなかった優秀論文賞の山本・結城論文に関して結城雅樹氏より受賞コメントをいただきました。論文の受賞理由を再掲するとともに、受賞コメントを掲載いたします。

優秀論文賞

山本 翔子・結城 雅樹

「トロッコ問題への反応の文化差はどこから来るのか？ 関係流動性と評判期待の役割に関する国際比較研究」(第 35 巻 2 号)

道徳的ジレンマ課題として有名なトロッコ問題において、日本人はアメリカ人と同様の倫理判断をするものの、行動意図は日本人がアメリカ人よりも低いのはなぜか。本研究は社会生態学的な視点から、関係流動性によって人々の行動意図が異なるという仮説を検証している。日本人の方がアメリカ人よりも関係流動性を低く知覚しており、関係流動性の低さが作為の行動に対するポジティブ評判期待の低さを予測し、これらが行動意図の文化差を媒介することを示した。社会的にも国際的にも重要な道徳的ジレンマの問題に対して、文化差が生じる理由を説得力の高いデータをもって明らかにした点が、理論的發展をもたらしたものとして高く評価された。また、態度と行動の乖離という社会心理学の古典的なテーマに対して、新しい知見をもたらしたという点でも影響力をもつことが期待される論文である。

受賞コメント

2020 年度日本社会心理学会優秀論文賞受賞の言葉

結城雅樹

この度は大変名誉な賞をいただき、誠にありがとうございました。第一著者の山本翔子さんがすでにアカデミアを離れているため、在学時の指導教員であり、第二著者の私がこの文を書いています。

本論文は、私のラボでこれまで行ってきた関係流動性研究を土台としつつも、それを有名な道徳ジレンマ課題である「トロッコ問題」に適用しようと試みたものです。この斬新なアイデアは、山本さん自身が学部生時代に発案したものです。当初はこのアイデアに正直ピンと来ませんでした。しかし、忍耐強い彼女との数カ月間にわたる議論は、非常に興味深い仮説の検証につながりました。新鮮な発想を持つ学生との共同研究から斬新な仮説と知見が生まれる過程を目の当たりにすることができ、これほど教員冥利に尽きることはありません。

本論文のリサーチクエストは、トロッコ問題における倫理判断と倫理行動の乖離をもたらす社会的要因を探ることでした。この課題の典型的なシナリオでは、線路上にいる 5 人の保線員に向かって暴走列車が走ってくる状況が描かれています。このとき、5 人の命を救うために、線路の切替えレバーを引いて、別の 1 人が作業している方に列車の進路を変えることは、果たして倫理的に正しいでしょうか。国際比較による先行研究



では、進路変更を倫理的に正しいと感じつつも、実際その場面に居合わせたら自分はレバーを引かないだろうという倫理判断と行動意図との乖離が、イギリス人よりも中国人の方が大きいことが示されていました。しかしこの文化差の原因は明らかにされていませんでした。

私たちはこの原因を、中国など関係流動性(対人関係の選択の自由度)の低い社会に住む人々は、イギリスなど関係流動性が高い社会に住む人々と比べて、賛否両論を引き起こす可能性のある行動を回避しがちだからだと考えました。低関係流動的な社会では、自分の行動に対して周囲の賛同者から社会的称賛を受けることよりも、反対者からの社会的批判の回避を優先したほうが、固定的な対人関係の中で平穩に暮らしていく上で役立ちます。トロッコ状況でレバーを引くことは、現状に対して意図的に改変を加えるという意味で「作為」であり、賛否両論を巻き起こすリスクを伴います。一方、レバーを引かないことは、現状維持の「不作為」であり、称賛も批判も寄せられにくいのです。

私たちの日米比較研究の結果はこの仮説を支持しました。日本人はアメリカ人よりも、自分が関係流動性の低い環境に暮らしていると考えており、それが、レバーを引くことに対する周囲からの称賛期待の少なさにつながっていました。それはさらに、レバーを引く行動意図の低さにつながっていました。一方、倫理判断には日米差がなく、関係流動性や称賛・批判期待とも関連していませんでした。

以上の結果には、重要な社会的含意があります。伝統的に関係流動性の低かった日本社会において、人々が賛否の分かれる言動を避けがちな理由の一つは、当該の言動に対して周囲から賛同してもらえるとの期待が低く、批判のみがクローズアップされやすいことにあるのかもしれない。その結果、旧態依然の組織文化が残るなど、社会の発展が阻害されている可能性があります。

昨年以來、学問と政治、また学問と社会との関係がクローズアップされてきました。私たち社会心理学者も、批判を恐れ、ときに口をつぐんだり、科学的真実から目を背けてしまったりしがちになるかもしれません。もちろん、正当な批判は、科学の発展にとって不可欠です。しかし一方で忘れてはならないのは、賛同できる知見や主張に対して、きちんと賛意を述べることもかと思えます。それにより、賛否が分かれる革新的な意見やアイデアが発表されやすくなり、また賛否が出揃うことにより、科学の発展のために不可欠な議論が可能となります。というわけで、皆さんからの称賛メッセージをお待ちしています笑。

(ゆうき まさき・北海道大学)

2020年度 日本社会心理学会「若手研究者奨励賞」候補者の 選考経過と選考結果

「若手研究者奨励賞」選考委員長 岡隆

本年度の「若手研究者奨励賞」受賞者の選考経過と選考結果をご報告申し上げます。本年度は16件の応募があり、4名の選考委員による厳正な採点と審査の結果、以下の7名を授賞者と決定いたしました。選考委員の先生方に各自、講評を書きいただきましたので、あわせてそちらもご覧ください。

受賞者(応募順)

清水佑輔 (しみず ゆうほ)	「あなたが抱く高齢者への差別的態度は、あなたの将来に悪影響をもたらす」—ステレオタイプ・エンボデメント理論を活用した差別的態度の軽減—	東京大学大学院 修士課程1年
中越みずき (なかごし みずき)	システム正当化理論の観点から低所得層の政治参加を捉える	関西学院大学大学院 博士課程前期課程2年
謝新宇 (しゃ しんう)	愛着不安が身体的攻撃につながるプロセスの解明: DVのエスカレート法則の観点から	広島大学大学院 博士課程前期2年
前田楓 (まえだ かえで)	直観的な協力は集団の枠を超えられるか: 最小条件集団パラダイムを用いた検討	安田女子大学大学院 博士後期課程2年
矢澤順根 (やざわ あやね)	対人関係におけるクリティカルシンキングの役割モデルの提案と検討	広島大学大学院 博士課程後期1年
柏原宗一郎 (かしはら そういちろう)	受け入れ拒否はなぜ生じるのか?: Zero-Sumの観点からの検討	関西学院大学大学院 博士課程前期課程1年
水野景子 (みずの けいこ)	罰がなぜ協力を阻害するのか?: 社会的ジレンマにおける罰による意思決定変容の検討	関西学院大学大学院 博士課程前期課程2年

選考経過

1) 募集

5月30日に、今年度の募集要項と応募用紙を学会のHPにアップするとともに、募集開始をメールニュースで会員に告知をした。締め切りは例年通り9月30日とした。

2) 選考委員選出と第一次審査

応募総数16件につき、第一次審査を行った。選考委員は、理事から2名、一般会員から2名を推薦し、下記の4氏について会長と常任理事会の承認を得た。

選考委員(敬称略)

理事より: 小川一美(愛知淑徳大学)、渡邊芳之(帯広畜産大学)

一般会員より: 沼崎誠(東京都立大学)、林直保子(関西大学)

審査方法については、従来の手順を踏襲し、選考委員はお互いに匿名としたうえで、個別に各応募に対して、A(優れている)、B(普通)、C(やや劣っている)を付与することで行った。なお、A評価は5本以内とした。

3) 第二次審査

第一次審査結果に対して、A評価は40点、B評価は10点、C評価は5点をそれぞれ与えて得点化し、4名の選考委員の合計点を算出した。メール審議の結果、コロナウイルス感染拡大に伴って多くの研究者の研究の実施・継続が困難になっている現状のなかで、ひとりでも多くの若手研究者を支援したいという考えから、得点の高い順に上位7名を授賞対象とすることで合意し、常任理事会と理事会に推薦した。

2020年度「若手研究者奨励賞」選考委員4名による講評

小川一美先生(愛知淑徳大学)

今年度の特徴の一つは、オンラインによるデータ収集を計画された研究の増加だったと思います。オンラインによるデータ収集と対面によるデータ収集の比率を、昨年度(総応募数27件)と今年度(総応募数16件)で比較してみました。オンライン:2019年度14.8%→2020年度50.0%、対面:2019年度70.4%→2020年度25.0%、オンラインと対面の併用:2019年度0%→2020年度12.5%、不明:2019年度0.0%→2020年度12.5%。COVID-19終息の兆しが見えない状況で応募書類を作成されたわけですから、対面によるデータ収集をあきらめた方が増えたのでしょうか。しかしそれだけでなく、トレンドとしてオンラインによるデータ収集に社会心理学研究がシフトしつつあるということでもあるのでしょうか。多様なサンプルを求めてオンラインを活用するという研究も見られました。Zoomを活用して実験を行うといった研究計画などは、劣った環境下でもなんとか適切なデータ収集を目指そうとされる姿勢の現れのように思いました。その一方で、実験室実験の方が望ましいと思われる研究計画もやはり有り、多方法によるデータ収集は一連の研究の妥当性検証にもなるはずですから、COVID-19が終息したらデータの収集方法を変えて再度実験をされることを期待してしまいます。制約なく、思う存分、ベストだと考える方法でデータが収集できる日が早く戻ってくることを願ってやみません。

渡邊芳之先生(帯広畜産大学)

昨年に続いて若手研究者奨励賞の審査に携わらせていただきました。昨年と同様に、応募された研究計画はいずれも明確な意義と目標を持ち、実行可能性の高いもので、その中から一部を選考するのは難しい作業でした。

審査を通じて印象に残ったのは、若い先生方の興味や研究テーマに、現実の社会的問題と直接関連したソーシャルなものが多かったことです。奨励賞を受賞した7件の中にも、高齢者への差別、低所得層の政治参加、外国人移民の受け入れ拒否など、現実の社会的問題と直結する研究テーマがいくつも含まれています。歴史的に見ればこうした研究こそ「社会心理学」なのですが、そうした研究が多くなっていることは、私のように「社会的認知の内的過程」のような比較的微視的な研究テーマが流行していた時代に学生生活を送った世代から見れば、隔日の感があります。こうした研究が発展し、そこから得られた知識が社会にフィードバックされて、社会的問題の解決や改善につながっていくことを強く期待します。

なお今回の審査では、新型コロナウイルス感染拡大に伴い研究活動に困難を生じている若手研究者が多いという認識から、可能な限り多くの研究計画に奨励賞を授与するという方針で審査を行い、それを理事会にも認めていただきました。これからの学会の機能について議論が高まる中で、研究者の支援についての本学会の考えが示されたのはよいことだったと思います。

沼崎誠先生(東京都立大学)

昨年度に引き続き、若手研究者奨励賞の審査にたずさわることになりました。今年度はコロナウイルスの影響が昨年度に比べ応募件数が少なかったようです。コロナウイルス影響下の中で参加者との対面での研究がしばらく中でのように研究を進めていくかについて多くの申請者の方が工夫されていたように思いました。審査者としても参考になる研究方法についての情報をいただき、ありがたく思いました。今年度も申請書のレベルは全体的に高いという印象を受けました。しかし、昨年度に比べ実証可能性について疑問を持たざるを得ない研究がいくつか見受けられました。昨年度の講評で書いたことと逆のことを書くようですが、現実の社会や人間にとってどのような意義のある研究かが明確となっていて非常に魅力的な研究目標が書かれている一方で、実証研究の部分になると十分に練られておらず、その研究で得られる実証データが、その大きな研究目標と関連してどのような意義を持っているのかが明確ではないように感じられる研究が散見されました。制限のある研究環境の中で研究をすることは大変なことですが、データを得る前に、得られるデータがどのような意味を持ちうるのかをきちんと考えた上で研究を進めていただければと思います。最後に、今回採択されなかった研究においても、非常に有意義で面白い研究もあったと思います。採択されなかった場合でも、研究を実施して、次の研究へと続けていかれることを期待しています。

林直保子先生(関西大学)

昨年度に引き続き、若手研究者奨励賞の審査を担当させていただきました。昨年に比べると応募件数がやや少なめで、厳しい社会状況の中、皆さん苦勞されているのだらうと感じました。さて、昨年度の講評で、以下のように書かせていただきました。「申請する側としてはどうしても限られた紙面の中に「大きな夢」を掲げたくりますが、1件に与えられる研究費が10万円という本賞の性質を考慮して、研究の長期的・究極的なゴールと同時に、今回の助成金で実現される短期的な成果がある程度具体的に想定できるかどうかを意識して審査しました。」その意図をくみ取っていただいた影響もあるのかと思いますが、今年度の申請書は研究のスコープがクリアなものが多い印象を持ちました。少ない紙面の中で、工夫して研究の目的や方法を提示していただき、大変刺激を受けました。審査委員会では、コロナ禍の厳しい状況の中で少しでも若手の皆さんを支援したいということで、今回の選考結果となりました。わたくしも今でこそ、実験が難しい環境ならば、少し手を止めてアイデアを練ってみようか、という気持ちにもなりますが、30年前の若手の時であったなら、焦りまくってさぞ大変な精神状態になっていたのではと思います。若手の皆さんには、このような時こそ、柔軟な発想と工夫でなんとか乗り越えてほしいと思いました。

(おか たかし・日本大学)

第31期役員選挙のご報告

結果報告

第30期選挙管理委員会委員長 西田公昭

第31期の役員選挙は、第60回大会総会で承認いただきました役員選挙規程に基づき実施いたしました。また、先回に引き続き投票方法はオンライン投票となりました。投票期間は2020年11月2日から24日までとし、期間中、投票を促すメールを3回お送りしました。役員選挙の開票に際しては、選挙管理委員4名(西田公昭、長谷川孝治、笠置遊、宮本聡介)と事務局担当(古川佳奈)が集計結果を確認し、当選者、次点者、次々点者を決定いたしました。いずれの選挙におきましても、同数の得票に関しては、複数の選挙管理委員により抽選を行いました。以下、開票結果をご報告いたします。

役員選挙における有権者数は1,241、投票総数は247、投票率は19.9%となりました。投票率は第27期が25.6%、第28期が23.4%、第29期が23.3%、第30期が26.7%でしたので、今期の選挙では投票率が大幅に減少したといえます。区分ごとの得票数、投票率は、表1をご覧ください。開票は2020年11月28日に、会長、全国区理事、地方区理事、監事に分けて行いました。それぞれの区分での開票時点または最終時点での当選、次点、次々点までの結果は、表2から表8をご覧ください。得票が同数の場合、重複しての当選の場合などについては、役員選挙規程に則って処理しました。開票終了後、当選者に就任の諾否を尋ねたところ、3名の辞退がありましたが、次点・次次点を含めてすべての当選者から就任の承諾を得ることができ、2020年12月7日にすべての役員(会長、理事、監事)が確定しました。

第31期の会長に当選した岡隆氏から、編集担当常任理事として大坪庸介氏、事務局担当常任理事として大江朋子氏、任意の担当の常任理事として工藤恵理子氏の指名がありました(選挙規程第10条第2項)。2020年12月24日から2021年1月5日に理事による信任投票を実施しました。2021年1月6日に開票しました。その結果、不信任0票、棄権4票、白票0票、その他すべて信任票となり、3氏とも信任されました。

残り3名の常任理事を選出するために、2021年1月8日から2021年1月20日まで理事による互選を実施しました。開票は1月21日に行いました。その結果、1~3位までは決まりましたが、4位に同数票の方が2名おられましたので、4人の選挙管理委員立ち会いのもと(Zoom)、抽選を行い、順位を決めました。その結果に基づき、当選者に就任の諾否を尋ねたところ、上位3名のうち2名が辞退されましたので、次点、次次点の方を繰り上げ当選としました。最終的に2月1日をもって、三浦麻子氏、村本由紀子氏、相馬敏彦氏、の3名の常任理事を確定しました(表9)。

以上で、第31期の役員が全員確定したことをご報告いたします。

選挙管理委員会からのコメント

ここ数回の役員選挙において、投票率が20%を下回ったことはありません。なかでも、前回30期の投票率が26.7%だったことを考えると、今回の投票率の低さは際立っています。この背景の1つに、コロナ禍のため第61回大会を対面で実施することができなかったことが挙げられます。学会は、毎年、夏から秋にかけて開催されます。役員選挙が実施されるのは11月ですので、学会総会時に役員選挙について言及する機会があります。しかし本年度は対面での大会が開催できなかったことから、総会等での告知だけでは会員に役員選挙のことを十分にお伝えできなかった可能性があります。

29期の役員選挙では常任理事の辞退の問題が指摘されていました。今回の役員選挙では、理事・監事の辞退者が3名、また常任理事の辞退者が2名出ました。理事・監事辞退者3名はいずれも勤務校での定年が間近の方でしたので、やむを得ないものと思います。一方、常任理事を辞退された2名については、先に選挙結果が報告された近接領域の学会で役職に就かれたことが辞退の理由でした。こうした事態は今後も続くものと思われます。1つの対策として、役員選挙の時期を今よりも早めるなど、何らかの対策が必要であると考えます。

(にしだ きみあき・立正大学)

表1 第30期役員選挙投票数

区分	有権者数	投票者数	投票率
会長	1241	247	19.9%
全国区理事	1241	247	19.9%
地方区理事(北海道・東北)	83	28	33.7%
地方区理事(関東)	579	102	17.6%
地方区理事(中部・近畿)	435	91	20.9%
地方区理事(中国・四国・九州・沖縄)	138	24	17.4%
監事	1241	247	19.9%
海外	6	2	33.3%

表2 第31期役員選挙開票結果(会長)

氏名	得票数	順位	当選者
岡 隆	92	1	○
三浦 麻子	21	2	次点
亀田 達也	19	3	次々点
小計	132		
次々点未満	110		
白票	55		
合計	247		

表3 第31期役員選挙開票結果(全国区理事)

氏名	得票数	順位	開票結果	最終結果
大江 朋子	91	1	○	○
沼崎 誠	88	2	○	○
相川 充	16	3	○	(辞退)
稲増 一憲	9	4	○	○
亀田 達也	8	5	○	○
大沼 進	7	6	○	○
小塩 真司	7	6	次点	○
浦 光博	7	6	次々点	○
池上 知子	7	6		次点
小計	240			
次々点未満	216			
白票	38			
合計	494			

注:6位から次々点は抽選による。

表4 第31期役員選挙開票結果
(地方区理事:北海道・東北)

氏名	得票数	順位	当選者
辻本 昌弘	7	1	○
大沼 進	5	2	次点
福野 光輝	4	3	次々点
小計	16		
次々点未満	10		
白票	2		
合計	28		

表5 第31期役員選挙開票結果
(地方区理事:関東)

氏名	得票数	順位	開票結果	最終結果
工藤 恵理子	32	1	○	○
大江 朋子	11	2	○	全国区で当選
外山 みどり	7	3	○	(辞退)
沼崎 誠	6	4	次点	全国区で当選
田中 堅一郎	6	5	次次点	○
田中 知恵	5	6	次次次点	○
繁樹 江里	5	6		次点
小計	87			
次々点未満	159			
白票	60			
合計	306			

注:4位、6位は抽選による。

表6 第31期役員選挙開票結果
(地方区理事:中部・近畿)

氏名	得票数	順位	当選者
吉沢 寛之	18	1	○
五十嵐 佑	12	2	○
元吉 寛之	10	3	次点
池内 裕美	6	3	次々点
小計	46		
次々点未満	114		
白票	22		
合計	182		

表7 第31期役員選挙開票結果
(地方区理事:中国・四国・九州・沖縄)

氏名	得票数	順位	当選者
中島 健一郎	4	1	○
三沢 良	3	2	次点
坂田 桐子	3	3	次々点
小計	10		
次々点未満	11		
白票	3		
合計	24		

注:次点、次々点は抽選による。

表8 第31期役員選挙開票結果(監事)

氏名	得票数	順位	当選者
相川 充	57	1	全国区理事に当選
外山 みどり	50	2	地方区理事に当選
池上 知子	4	3	(辞退)
村田 光二	4	3	○
三船 恒裕	3	4	次点
小計	118		
次々点未満	102		
白票	27		
合計	247		

注:次点は抽選による。

表9 第31期役員選挙開票結果(常任理事)

氏名	得票数	順位	当選者
三浦 麻子	8	1	○
五十嵐 佑	6	2	(辞退)
北村 英哉	5	3	(辞退)
村本 由紀子	4	4	○
相馬 敏彦	4	5	○
大沼 進	3	6	次点

会員異動(2020年12月31日~2021年3月15日)

入会

《正会員》

- ・一般 和智 妙子(科学警察研究所犯罪行動科学部主任研究官)
- ・大学院生 鐘 文煜(関西学院大学社会学研究科)

退会

高橋 正泰

所属変更

宇佐美 まゆみ(国立国語研究所日本語教育研究領域)、佐藤 剛介(久留米大学文学部心理学科准教授)、藤原 健(National Chung Cheng University)

『社会心理学研究』掲載(予定)論文**第36巻第3号****【原著論文】**

酒井智弘・相川充 感謝表出スキルの実行がジレンマ状況にいる感謝される側に及ぼす効果 ※既報

志水裕美・清水裕士・紀ノ定保礼 社会経済的地位と怒り表出のメカニズム:心理的特権意識と正当性評価の媒介効果に注目して

【資料論文】

石黒格 二要因モデルに基づく利益最大化傾向の日本語版尺度の作成 ※既報

舘石和香葉・小野田竜一・高橋伸幸 罰行使の動機推定が評判に与える影響:複数の罰選択肢を用いた検討

山岡明奈・湯川進太郎 マインドワンダリングの内容と創造性および精神的健康との関連

編集後記

第30期役員任期も終わりに近づいています。任期中最大のトピックは新型コロナウイルス感染の問題でした。広報委員会としてできたことは微々たるもので、もっとできたのではないかと思っているところもあります。他方で、10年前の東日本大震災時の活動の経験から、会員にやりがい搾取をすることもまた良くないと考えていました。結局、日頃からのコンテンツの充実とその積み重ねが大事なのだ、と10年前と同じ感慨をもっています。色々と議論を呼びながら粛々と業務をこなしていただいた第30期広報委員の皆様、心より感謝いたします。ありがとうございました。第31期広報委員会の皆様、よろしく願いいたします。って委員として残る予定なのだった、ワタクシ。今後もよろしく。(藤島喜嗣・広報担当常任理事)